

編 集 後 記

数年前の雑誌に、次のようなことを書いたことがある。職場の胃集団検診を行なうと、はじめの年には癌が思うように見つかるだろう、しかし、だんだん胃潰瘍患者の健康管理ということになるのではないかと。そんなに潰瘍性胃は多いものである。最近、ひどい潰瘍は減ってきた。ところが、今まではわからなかった小潰瘍や瘢痕の診断が進み、ひろい上げられるようになると、頻度としては少しも減らないようである。こと胃潰瘍にかんしては、くりかえし、くりかえし論じてもあきない。それだけ時点により考察面に新味がでてくるし、旧態の論との融合が面白い。診断、治療について、諸先生の論旨をかみしめ、自分の胸の中で経験例と照し合わせるのは楽しみである。何歳頃、胃潰瘍が、胃にはじめて生ずることが多いのだろうか、なぜ胃潰瘍は減らないのだろうか、難治性潰瘍というものの現時点での定義は、村上分類 U1 II は粘膜集中像を作らないのか、などなど自分勝手な夢をみているところである。

われわれの大先輩で指導者であられる黒川利雄先生を後輩が訪ねることになった。臨床では体験の豊かな大家のお言葉の一句一句が教科書なのである。

<白壁彦夫>